

竹影掃堦塵不動

長男の出家○三浦清宏

月穿潭底水無痕

竹影掃堦塵不動

長男の出家○三浦清宏

月穿潭底水無痕

竹影掃堦塵不動

長男の出家○三浦清宏

月穿潭底水無痕



三浦清宏（みうら・きよひろ）
一九三〇年、北海道室蘭市に生まれる。東大教養学部入学後、米国に学び、アイオワ大学創作科卒業。旅行会社勤務等を経て、現在明治大学工学部教授。八八年、「長男の出家」で第九回芥川賞受賞。著書として、「イギリスの霧の中へ」がある。

長男の出家

一九八八年二月二〇日 第一刷発行
一九八八年四月一日 第五刷発行

定価一〇〇〇円

著者 三浦清宏

発行者 福武總一郎

発行所 株式会社福武書店

東京都千代田区九段南二二二八
千三三電話〇三三〇二二三一
振替口座（東京）六一〇五〇九七

印刷 製本 大日本印刷

平版印刷 栗田印刷

（落・乱丁本はお取替え致します）

目次

長男の出家

5

トンボ眼鏡

145

黒い海水着

215

装丁
田村
義也

長男の出家

長男の出家

僧になりたい、と息子が言い出したときには、驚いた。

ある春先の日曜日の朝、いつものように息子連れて坐禪に行く途中だった。息子は小学校の三年生になったばかりだった。

「お坊さんに頼んでよ。お父さん」と歩きながらぼくを見上げて言った。

息子がぼくにこんなふうにものを頼むのははじめてだった。ものを頼むどころか、こっちが何か言わなければ、ただ黙ってついて来るのが普通だった。何か思いついて言ったというのでもなく、何日か心の奥に浮きのように出たり入ったりしていたものが、ぴよこんと勢いよく飛び出したという感じだった。

とは言え、ぼくはそれほど真剣に受けとめたわけではない。第一あまりに唐突だった。ぼくは息子に坐禪をさせようと思ったことさえなかった。遊園地代りに連れてい

ったようなものだ。第二に、その頃「一休さん」というマンガのシリーズがテレビで放映されていて、息子は毎日欠かさず見ていた。

ぼくは息子の言ったことは忘れてしまったが、息子は忘れなかった。

「お父さん。お坊さんに言ってくれた？」

二、三週間たった日曜の朝、やはり寺に行くときに言った。そのうかがうような、不安そうな様子から、ぼくは彼が日曜ごとの坐禅の後の昼食の席で、いま言ってくれるか、いま言ってくれるかと、ぼくと和尚との話のやりとりを見守っている様子を察した。

その日の昼食のときに、ぼくは、

「息子が坊さんになりたいそうですよ」

と笑いながら和尚に言った。それで息子との約束を果たしたつもりだった。

「そうか」

和尚は禅宗で言う「破顔一笑」という顔を息子に向けた。

「いい坊さんになれるかな」

「はう」

息子は真剣にうなずいた。

ぼくはいささかあわてた。こういうなりゆきは予想していなかった。和尚も、子供のことだぐらいいに受けとつて、冗談にしてしまうだろうと思つていたのだ。この和尚には、うっかりした冗談は通じない。子供のことといえども真剣になることを忘れていた。ぼくは急いで言つた。

「まだ小学生ですからね。どう変わるかわかりません。たぶんマンガの影響ですよ。小学校を卒業してからまた考えましょう」

「マンガの『一休さん』を見たからかい」

和尚は息子の顔を優しく覗き込んだ。

息子は小さな首を振つた。

「そうか。そうか。それでも小学生ではまだ早いな。もう少し大人になってからにしよう」

寺の都合もあるし、というようなことを和尚は言つた。その言い方には、子供の言

い分を大人流にあしらうという様子は少しもなかった。

和尚はその後、話の中に息子のことが入ってくると、息子の顔を覗き込んで、

「良太君は坊さんになるんだって？」

とか、

「どうだ、この小坊主さんは。しっかり勉強しているかな」

などとからかったりした。

そのたびにぼくは、「中学に入ってから」と言い続けたが、和尚がどこまで本気なのか、不安になった。

寺から帰る途すがら、

「お坊さんになったら、お掃除したり、雑巾掛けしたり、たいへんなんだぞ。それでも坊さんになりたいか」

と聞くと、勉強するより、体育や工作など手足を使うことの好きな息子は、

「うん。うん」

と真剣な顔でうなずくのだった。

この問答は、息子が四年生になり、五年生になり、六年生になっても続いた。答えは変らなかつた。

相変らず、

「うん」

とだけ言つて、それ以上のことは言わない。

「坊さんになりたい」と言い出した三年生の頃、息子は大人たちにまじつて坐禪をすると言ひ出した。ふつうは一回四十分を約三回坐るのだが、息子ははじめ五分ぐらいでもぞもぞしはじめ、外へ出て行つた。そのうちだんだん時間がのびて、一回分になり、やがて二回、三回となつて、六年生の頃には大人と同じに坐るようになった。脚の組み方も堂に入つていて、手を使わずにスツと組む。修行した僧などはみなそうするようだが、ぼくなど中年ではじめた者は、手を使わなければ脚を組めないし、組んだ後も、ずらしたり組み直したりする。

子供で体が柔らかいからだろうと思うが、脚の組み方はともかくも、学校ではふざける方の先頭で、親の目から見ても、落着きのない子だというのが、まず第一の特徴

であるこの子が、寺に來ると別人になるのが、何とも不思議だった。

「親の影響ですよ」

と他人は言う。

「親が連れてゆくから、そういうことになるんです」

と批難めいた口調で言ったのは、息子が生れた時からよく面倒を見てくれた叔母だ。

たしかにそうだが、喜んでついて來たのもまた事實だ。それも不思議なことだった。友達と遊びたいから行かないなどと言ったことは一度もなかった。日曜になると、まるで学校へでも行くように、大きな弁当箱を入れた袋を下げて、まだ母親や妹の眠っている家を、ぼくといっしょに出て來た。途中「マクドナルド」でハンバーガーを食べたり、駅で熱いそばを、吹きながら食べたりする楽しみのせいだろうかとも思ったが、それにしても、その後の時間は長くて単調なものなのだ。

寺に着いてから、ぼくらが坐禪を終えて昼食になる午後二時頃までの間、何をしていたろう。はじめの頃は画用紙やクレヨンを持って行つて絵を描いていた。襖に描い

て叱られたこともあった。お手伝いのおばさんが買物に連れて行ったり、蟬取りに連れて行ってくれたこともあった。しかしたいがい一人で、まわりが墓地や草むらや雑木林に囲まれた人気のない庫裏で、淋しいとも思わずに遊んでいたのだろうか。賽銭箱から賽銭を盗んだり、仏像をどこかに隠したりしたこともあったが、あれも退屈まぎれの遊びだったのだろう。どんなに淋しくても、親父はたいして役に立たなかったに違いない。親父はただ義務のように連れて行き、連れて帰った。それでも、日曜になると、それが当然であるかのようについて来たのである。

禅海寺を見つけたのは、妻とぼくが散歩に出たときの偶然だった。十年ほどアメリカでの放浪生活を終えて帰ってきた三十代前半のぼくは、結婚して、東京郊外の開発中の土地に建ったばかりのアパートに住み始めた。初めのうち二人でよく近所を探訪に出かけたが、削り取られ、整地された丘陵地を上ったり下りたりしているうちに、いつの間にか寺の境内に入っていたのだった。きすげの咲く丘の斜面には、顔が欠けたり、腕がもげたりした石の地蔵が数体、草むらの中に埋もれていた。後で聞い

たところでは、明治の廃仏毀釈で捨てられたままになっていたものだということだった。その斜面の下に大きな桜の木があり、その下に萱葺きの小さい家が佇み、その先にそれよりもやや大きいくらいのも、やはり萱葺きの本堂があった。

鎌倉時代に出来たまま忘れられ、いまやっと開発のおかげで発見されたように見えるこの寺は、押し寄せてきた造成地に囲まれ、いまにも消えてなくなりそうに危うげで、もの珍らしく見えた。

“My goodness! An old temple!”

驚いたときには、日本語より英語の方が出易かったぼくは、そう言った。

「禅寺よ」

妻は本堂の柱に打ちつけられていた全体に黒ずんだ細長い板を指して言った。

“Look at it!”

墨の色も板の色も同じになり、風化した凹凸によってやっと判読出来る文字は、

「禅海寺参禅道場」

と読めた。